

○水は、PH5.4



水道局の浄水場の水は茶褐色

マナウス市内には水道が整備されていたが、ネグロ川（アマゾン川の一部）の茶褐色した水を利用して。浄水場の見学時、水道局の人は「水道水は浄水されており、安全だ。」と言っていた。

しかし、水道から出てくる茶褐色の水をそのまま飲むのには勇気がある。先輩はフィルターで濾過していたので、うちもさっそく取り付けてみた。（下写真右側）

使用後はコーラルのようなものがネトリ付いていて、水に栄養分？がたくさん含まれているような感じだった。

人々は生活の場所やスタイルに応じて、様々な水を利用していた。

ジャングルの中に住んでいる人は、生活全てを川の水に頼っていた。

街に住む人は、水道の水を飲んだり、飲料用の透明の地下水を買って飲んだりしていた。

私たちが地下水を買っていたが、ラベルには「PH5.4」と表示されていた。

アマゾン川の水も同様に強い酸性だそうで、シャワーの水を浴びた時、傷口があるとピリピリした。



中央の白色フィルターは未使用
左側は使用後



電気加熱装置付きのシャワー

シャワーは水の出口に電熱器のような加熱装置がついていて、それでぬるま湯？ぬるま水に温めていた。

気温が高いので、お湯は熱く感じた。慣れてくると、水の方が快適だったが、疲れをとるといより、汗を洗い流すだけという感じだった。

シャワーの加熱装置は、よく故障した。全身が濡れている状態で修理をすることがあったが、よく感電しなかったなど後でゾツとした。感電するかもしれないとスリルを味わいながらのシャワーだった。でも、これで冷や冷やして、涼しくなったのかもしれない。

○コーヒーの思い出

レストランで水は有料だが、コーヒーは無料だった。ブラジルのコーヒーはおいしいが、濃厚でとても甘いのでカフェジニョというデミカップで少しずつ飲んでた。

学校では毎日、コーヒーをたくさん作って魔法瓶に入れておいた。朝から日直がみんなに一杯ずつ配るが、砂糖入れにいつもアリが侵入していた。

始めはアリをていねいに除去していたが、あまりにも面倒だったので、あきらめてついにそのまま入れたことも何度かあった。けっして、他意はなかったのだが。

ところが、アリはコーヒーの中に入るとほとんど見分けがつかなくなったので、ばれなかった。当時の先生方、ごめんなさい。かえって栄養分が加味されて、よかったのかもしれない。

○アリをなめたらダメ

前述のコーヒー当番では、アリとの闘いがあったが、別の場所でも壮絶な闘いがあった。

校地にヘビが侵入してきたらわかるようにと、校庭の除草作業は欠かせなかった。ある日、せっせと草を刈っていたら、足がなんだかムズムズしてきた。ズボンをめくると、たくさんのアリが足に上ってきていた。

すぐシャワー室に駆け込み、ズボンを脱いだら、太腿までアリがびっしり。やっとのことで払い落とした。気づくのがもう少し遅ければ...と思うと、ぞつとした。私がアリの巣穴を踏んづけていたので、逆襲してきたのだろう。

生活科でサツマイモを収穫する時のことだった。イモを掘っている子どもたちの手にたくさんのアリが噛みついてきた。激しい痛みで、子どもたちは作業を嫌がった。

さらに攻撃性の強いすごいアリもいた。ハキリアリの中で仲間を守る役目のアリは、木の枝等で突つくと、鋭い牙で噛みつき返してきた。

ブラジルの建物の柱と床は鉄筋コンクリートだが、壁はレンガを積み上げたものだった。だから、部屋には別の住人もいた。アリとゴキブリだ。アリは、このレンガの中に巣を作っていたのだと思う。アリのおかげで、片付けが上手になった。ゴキブリは、日本のものより小型だったが、よく飛んだ。いやはや、緊張の絶えない毎日だった。



建物の床と柱は鉄筋入り、壁はレンガのみ

ブラジルでは地震が起こらないから、この建築方法でいいのだそうだが、レンガを積み上げたただだったので、「ペランダの手すりには寄りかかるな」と言われていた。

○アマゾン川の水で作った魚のスープがベスト

料理の味付けはこってりと油っこく、とても辛いコショウがよく使われていた。シュハスコとよばれる大きな肉の塊の焼肉、フェジョアードと呼ばれる豆といろんな肉と野菜の煮込みなどの他、アマゾン川の魚料理もあった。

日系の方に釣りに連れて行ってもらったときのことだ。



アマゾンでの刺身初体験

醤油とわさびをもって行って、釣った魚を刺身にして食べた。私は、アマゾン川の生魚を食べることに不安があり、「大丈夫ですか？」と尋ねた。

すると「大丈夫!!」と、きっぱりとした返事が返ってきた。



まるごとかぶりついた?

「どうして、そんなに自信を持って言うんですか？」と食い下がると、「これまで30年食べてきて、どうもない。おれも食べるから、あんたも食べなさい。」と返ってきた。

不安で、川魚特有の臭みも感じなかった。まあ、その後異常がなかったのも、大丈夫だったのかもしれない。

魚料理は、刺身よりアマゾン川の水で作った魚のスープの方が格別な味がして、そのおいしさは忘れられない。

川魚は特有の臭みがあるので、コショウ等の香辛料は欠かせなかった。ツクビー(マンジョカからファリーニャを作るときに絞った汁を発酵させて、とうがらしを加えたもの。アマゾンのインディオが生み出したものらしい)やコリアンダー(日本ではパクチーと呼ばれている)等の香辛料が病みつきになった。

また、ピラニアが入れ食い状態になった時、うれしかったが、「このボートが、ひっくり返ったら・・・」ととても心配になったこともあった。

○お札をゴミ箱に?

いっしょに赴任した先生が、先輩の先生に尋ねていた。「ブラジルから日本に帰ってきた人からお金をもらったけど、いくら位ですか？」

先輩は、ゴミ箱を指差した。

尋ねた先生は、「ええっ! ゴミですか? これは、そんなに昔のお金じゃないですよ。」と反論したが、無駄だった。何の価値もないとのことだった。

私たちが赴任する前にデノミが行われて、通貨名が「クルザード」から「ノーボクルザード(ノーボ:新)」になり、レートは1US\$=1ノーボクルザードだった。

当時のお札には、50、500、1000、10000の4種類の数字が書かれていたが、50だけが「ノーボ(新)クルザード」になっていて、他は旧の「クルザード」のまま0を3つつけて計算するよう言われた。(フランスワイン「ボジョレ・ヌーボーのヌーボーも「新しい」の意味)

初めて買い物をした時は、お金の区別がよくわからなかった。財布を広げて相手に必要だけ取ってもらった。後で考えると、なんて恐ろしいことをしたんだろうとゾーッとした。今も、あんまり変わらないようだ。

1年後に1US\$=80ノーボクルザードになった時点で再びデノミが行われて通貨名がクルゼイロとなり、1US\$=40クルゼイロになってしまった。さらに、2年後には、1US\$=1500クルゼイロになってしまった。ゴミ箱行きの理由が、よくわかった。

US\$小切手を現地通貨に両替すると、分厚い札束になる。両替所から、分厚い札束を抱えて出るのはとても不安で、紙袋に入れてわからないよう持ち帰った。

通貨名の由来は、南十字星である。英語: Southern Cross ポルトガル語: Cruzeiro do Sul

▲ブラジル通貨のデノミの歴史

1942 レアルからクルゼイロに (1/1000)

1967 クルゼイロを新クルゼイロに (1/1000)

1970 新クルゼイロをクルゼイロに (1/1)

1986 クルゼイロをクルザードに (1/1000)

1989 クルザードをクルザード・ノヴォに(1/1000)

1990 クルザード・ノヴォをクルゼイロに (1/1)

1993 クルゼイロをクルゼイロ・レアルに (1/1000)

1994 クルゼイロ・レアルをレアルに (1/2750)

○防虫? 殺虫?

ジャングルツアーに家族で出かけた。けがや虫対策のため長袖シャツ、長ズボン、足首を隠すバスケットシューズのような靴、虫除けスプレー等を準備するように言われた。

ブラジルの虫除けスプレーの商品名がわからなかった。日本語-ポルトガル語の辞書を駆使して「虫に対して保護する薬」という意味につながるポルトガル語を探して、「Remedio para proteger contra bicho」という言葉をやっとのことで考え出し、紙に書いて薬局へ向かった。薬局で商品を見るとそれらしき物はあったのだが、これが虫除けスプレーだとはなかなか断定できなかった。

店員さんにメモを見せて尋ねることも、ちょっとためらった。というのも、もしかしたら「虫に対する...」という言葉で「虫除け」ではなく「殺虫」と解釈されてしまい、殺虫剤を渡されるかもしれないという不安がだんだんと募ってきたからだ。そこで、体に吹き掛けるジェスチャーをしながら「虫除けスプレー」を表現することで、なんとか買うことができた。

案内ガイドは半袖、短パン、サンダルという軽装だったが、私たちは完全防備の服装のおかげでトゲヤシが刺さったりチリリッカの葉で切ったり虫に刺されることもなく、ジャングルを歩き回ることができた。しかし、熱帯雨林での完全防備により、たっぴりと汗をかいてしまった。

さらに、思わぬことまで起きてしまった。ブラジルの薬は、とても強烈だったので、虫ではなく、虫除けスプレーの薬品に皮膚がかぶれてしまったのだ。